

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
 II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
 III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
 IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
 V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都市 】

1 実践テーマ	【 III 】
2 実施対象者	京都市立塔南高等学校 第3学年（280名）
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 () ② 行事名 (車椅子バスケットボール選手との交流学習) ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	(1) 障害者スポーツを通して個々の可能性を発見し、様々なことに対する偏見と誤解を払拭し、多様な状況に対応できる、考える力を育てる。 (2) 車椅子体験や交流試合、選手との対話を通じて障害者に対する理解を深めるとともに、共生の大切さを学び、また自分の生き方を考える機会とする。 (3) 障害のある人々が住みやすくなるために、社会はどう変わらなければならないかを考える機会とする。
5 取組内容	(1) 事前学習 ① 「オリンピック・パラリンピック教育」に基づく学習テーマと目標の理解 ② 車椅子バスケットボールの競技概要の学習 教材：日本障がい者スポーツ協会サイト『かんたん！車いすバスケットボールガイド』 http://www.jsad.or.jp/about/referenceroom_data/competition-guide_05.pdf ③ リオパラリンピックに日本選手団最年少で出場を果たした車椅子バスケットボール選手、鳥海連志さんに関する学習 教材：『めざせ!2020年のパラリンピアン』より 鳥海連志×香西宏昭(NHK総合、平成27年10月6日放送) (2) 車椅子バスケットボール選手（6名）との交流学習 講師：坂野 晴男 氏（日本車椅子バスケット連盟強化指導部員、シドニー・北京パラリンピックコーチ、KYOTO UPSコーチ）

- ①KYOTO UPS・LAKE SHIGAの選手の模範演技
- ②競技用車椅子での前進・ターン・後進の体験（全員）
- ③車椅子バスケットボールのゲームの体験（クラス対抗）
- ④車椅子バスケットボール選手の方々との懇談



(3) 事後学習

ホームルームで、感想文の抜粋をもとに交流し、振り返りを行う。

6 主な成果

◆ 事後アンケートの結果、以下のような感想や気づきが大多数の生徒のアンケートに見られ、学習のねらいを十分に達成したと認められる。

(1) 偏見や誤解の払拭と個々の可能性の発見

「はじめは障がいのある人ってこわいのかなと思っていたが、実際会ってみたら普通の人で、皆優しくて、自分の思い込みだったと気づいた。」「障害を持ったから新しい世界を見ることもできるし新しい挑戦ができたという話を聞き、前を向く姿勢がとても大事だと思った。」「自分の障害を前向きにとらえ、やりたいことに活かしていく姿勢を尊敬します。」「選手の方から『人生悔いの無いように』というメッセージをいただいて、自分も失敗を怖がらずに何事も挑戦しようと思った。」

(2) 障害者への理解と共生社会の大切さの理解

「16人に1人が障害者であると聞いて驚いた。この学習を通して「障害」ということを本当に身近に感じた。」「私達が目線からは見えない所を障がいのある方々は感じたり見えたりしているのだなと気づいた。」「車いすバスケット以外のことにももっと目を向けていきたい。」「社会ではバリアフリーが少しずつ進んでいるが、私達も意識して手助けできることは進んでほしい。」「困っている人を助けることができる人になりたい。」

(3) 共生社会の構築への意識の向上

「車いすに乗る人だけでなく、全ての障害者にとって過ごしやすい社会になればいいなと思った。」「『車いす生活に慣れたといっても、高いものが取れなかったり段差に困ったりすることがある』と聞いたので、その悩みが無くなるような便利なものを生み出したりしたいと思った。」



7 実践において工夫した点
(事業の特色)

(1) 運営への生徒参加

希望者を中心に、選手の移動の介助、開・閉会式の進行、車椅子体験の準備やサポート、車椅子バスケのゲーム体験等を生徒の手で行わせた。



↑ 花束贈呈



↑ 生徒代表謝辞

(2) 車椅子体験(全員)を初めて導入

実際に車椅子に乗ることによって、操作の難しさや腕への負担、不自由さ等を体験的に理解させた。

8 主な課題等

- (1) 実践テーマをⅢ以外にも複数設定し、「オリンピック・パラリンピック教育」の実践をより広く深く展開していけないか。
- (2) 事業の事前と事後の、生徒の意識の変化を数値的にとらえるための工夫(アンケートなど)が必要である。
- (3) 交流学习の各パートの時間配分の最適化を図る。

9 来年度以降
の実施予定

共生社会の構築に寄与しようとする意欲や態度を養うため、本事業を継続して実施していきたい。8に挙げた課題について解決・改善を図りながら、2020年東京オリンピック・パラリンピックへの機運醸成の観点をより鮮明にする方向で検討したい。